

---

絆

愛華麗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絆

### 【Nコード】

N6195B

### 【作者名】

愛華麗

### 【あらすじ】

女子高生の京は、家族くを嫌う今時の女の子。家族よりも友達が大事。そんな京の家に事件が起こり、親の愛情に気づく。

## （前書き）

読みにくいところもありますが、ご了承ください。

『うるっさいなあ!』

『京! 待ちなさい!』

【ボタン!】

親なんか大嫌い。顔見ればいつも怒ってるし。意味わかんない。あたしには友達がいればそれでいい。

うちの家族は名前だけで愛情なんかこれっぽっちもないもん。てか  
いらないけどね。

— そんな高校二年の秋。 キーンコーン

カーンコーン

『京』

隆太が大きく手を振りながら走ってきた

『なにい?』

『カラオケ行こ!』 隆太とは入学式で席が近かったのをきっかけに  
仲良くなった。今では週に4回は遊んでる。

> 今から3限目かあ… <

『いいよ 行かう!』

> 勉強とかだるいし! <

> もう9時かあ。楽しかったなあ! 隆太の歌声好きなんだよねえ <

【ガチャ】

『うわ！最悪！』

京の部屋がきれいに片づいていた。

『ちよつと！お母さん！何で勝手に人の部屋に入ってるの！？』  
だつて京、全然掃除してなかったじゃない』

『最低！』

お母さんは俯いたまま何もしゃべらない。

『もう勝手なことしないで！』

【ドタドタ バタン！】

『せつかく気分よかつたのに最悪！』

京は乱暴に制服を脱ぎ捨て、お気に入りの服に着替え、荷造りを始めた。

>みかの家にいつとき泊めてもらおう！こんな家にいたらイライラするだけだし！<

【ガチャ バタン！】

ピンポン

『お 京上がつて♪』 『おじゃまします』 靴を脱いでいると、奥からみかのお母さんの佐代が出てきた。

『あら、京ちゃん！いらつしゃい』

みかの家には頻繁に泊まりに来ているから佐代とも仲がいい。

京は佐代を自分の母のように慕っている。>みかが羨ましいな…こんなに優しい人がお母さんなんてさ<

『お世話になります』

その日はみかと二人で一晩中おしゃべりした。

【♪♪♪】

朝の6時15分頃。京のケータイが鳴った。

>電話？こんな朝っぱらから…だれからだろ<

京は画面を見た。

【自宅】

>うわ。朝から何でかけてくんのよ…うざいし<

【ピッ プープープー】

『ん…あれ？もう朝？』

みかが目を細めて京を見ていた。

『ごめん！起こしちゃった！？』

『うつん…スウー』

>寝るの早！（笑）あたしも寝よつと！<

京はまた眠りにはいった。

【♪♪♪】

また京の電話が鳴り響いた。

>…ったく。どおせまた親でしょ。うざいなあ<

京はみかを起こさないようにすぐ電源を切ろうとケータイを手を取

った。【隆太】

>あれ？なんだ！隆太からじゃん<

『は…い どしたあ？』

『…お前、今どこ？』

隆太の低い声がいつもと違っていた。

>様子がおかしい…<

京は寝ているみかをチラッと見た。

『な…何さ！そんな真剣な声してえ 隆太変だよあ？』

『どこだよ』

>あきらかにおかしい…<『みかの家…』

『…落ち着いて聞け。今さっきお前の家の前通ったんだ…。そしたら、お前の家に警察と救急車が来てた。』

京は理解できなかった。

>やば…なんだろ。めまいがする<

『ね…ねえ、なんでうちにそんなのが来てんの?』

『…とにかく早く戻って来い!』

みかはまだ寝ていた。

京は走った。なぜかきつくなかった。

>…べ…べつにお母さんもお父さんも…どうなったって…全然平気だし…<

何度も何度も心でつぶやいた。自分にいいきかせるように。

京の目には涙が溢れていた。

『京!!!!』

隆太が大きく手をあげていた。

>…!!<

数十人の警察官が一斉に京を見た。  
門の前には人だかりができている。みんなが京を見ている。

『りゅう…』

『宮田 京さんですか!?!』

ひとりの警察官に腕をつかまれた。

京は目を大きく開き、小さくうなずいた。

『一緒に中央病院まで来てください!』

言われるがままに京はパトカーに乗り込んだ。サイレンを鳴らし、もの凄いスピードで走り出した。

隆太は黙って連れていかれる京を見つめていた。

>.....<

京は頭が真つ白だった。車内には経験したことのない緊張感があった。警察官はただまっすぐ前を見つめている。

【キキイ！ バタン】

『早く降りて！こつちです！』

京は警察官に手をひっぱられながら走った。

まだ状況が理解できない。

まばたきもできない。息の仕方すらよく分からない。ただ、鼓動が早くなるのだけを感じていた。

…304号室

【ガチャ！】

『娘さんを連れてきました！』

京は息が止まった。

白い部屋に、お父さんとお母さんはいた。

包帯とガーゼで全身を覆われた二人は、医者と警察官に囲まれて横になっていた。

>.....何これ...<

『な...何してんのよ...冗談でしょ？み...みんなしてあたしを騙そ

うとしてんでしょ？」

京は二人から目を背けて笑った。

ひとりの警察官が京の目の前に立った。

『君の家に、朝強盗が入った。ご両親は、君の部屋の前で、犯人に抵抗したみたいだ。犯人はそのまま逃走したようだが、抵抗した際に刺されてしまった。』

京は、昨日の夜のことを思い出した。

>…あたしが…昨日部屋に勝手に入らないでって…言ったから…だから…<

『…お母さん…守って…くれたの…？あたしの部屋…刺されてまで…守ってくれたの…？』

京はベットに横たわる二人に駆けより、泣き叫んだ。

『ねえ…ねえ起きてよ…目え開けてよ二人とも！！ひとりにしないで…お願い…謝らせてよお！！』病室には、京の声だけが響いていた。

- 一年後 -

【ガチャ】

『ただいまあ！！聞いて！！k大学合格したよ！！』

『おめでとう 京！よくがんばったわね！！』

『お母さん…』

『なあに？』

『  
ありがとうね  
』

（後書き）

親というのは、なんだかんだ言っても我が子を愛しているもの。愛情に溢れているものなんですよ。みなさんのお父さん、お母さんもきっと同じです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6195b/>

---

絆

2011年1月18日09時46分発行